

「伏せられていた漱石日記」について

石 津 純 道

(高知大学文理学部 国語学国文学研究室)

I

これまで「漱石全集」に採録されてなかつた漱石の「日記」と「断片」が、既に知られるように、今度、全集編纂委員であつた小宮豊隆氏の手によつて、「世界」昭和三十年八月号に発表された。何故これを今迄伏せておいたか、それを今度どうして公表することにしたか、その理由と経緯については、小宮氏が解説「未発表の漱石日記について」(同誌)の中で明らかにしておられるが、漱石研究における貴重な新資料として注意されるものである。私も一応この資料を検討し、その前後の漱石の「人」及び「作品」との関係について若干の吟味を加えてみた。結果から言うと、この資料によつて従来の漱石研究を根柢から覆すといつたものは出て来ないように思われるのであるが、漱石の「人」と「作品」に対する理解を深め確める上に極めて大切な文献となることには間違いないと思われるので、その点を中心に、大体私の調べ、考えた所を報告しておきたい。

II

新資料はこれを大きく別けると、皇室に関する部分と家庭生活に関する部分とになる。皇室に関するものは、明治三十八・九年(1905・1906)のノート、及び明治四十二・四・五年(1909~1912)の日記に見られるものの様であるが、そこには、皇室に対する忌憚のない批判と、天皇側近の宮内官吏の無識や元老の醜い行為に対する激しい憤りが記されている。この資料の発表を差控えさせた最も大きな理由の一つもそこにあつた様であり、またそういう措置をとらざるを得なかつたことも当時としては無理のないことであつたに違いないと思われる体のものである。もつとも、今日から見れば、実に何でもない至極当り前の意見のようでもあるが、しかしこれが書かれた時代を念頭に置いて考えてみると、そう安々と誰にでも言えることではないのであつて、やはりこれは漱石の高邁な見識と鋭い批判力を示すものと言わざるを得ないであろう。

もつともそのうち、皇室の威光に加えた批判の部分は、既に漱石は「猫」最終回に、独仙をして殆んどそのままに語らせて居り(決定版漱石全集—以下同じ—第一卷六二五・六二六頁)、元老に関する部分は明治四十二年六月十七日の日記に出ている(第十五卷「日記及断片」四〇五頁)。伏字になつて一部分出ているものもある(第十五卷四一二頁)。またこういう考え方は、権力や金力を極度に嫌悪し、排斥し、飽くまで個人の自由と人格の尊厳を推重した漱石の思想からは当然出てくる筈のものであつて、全く目新しいものでも、特に耳新しいものでもない。ただそれを漱石自身の言葉としてじかに聞かせる点、またそういう漱石の考え方を更に実証するものである点、やはり新資料として注意されると思われるが、とにかく、その皇室批判なり側近への憤りなりは、実に厳しく徹底的であり、そこに述べられている意見も、極めて理性的且つ進歩的であつて、こういう内容からいつても、我々の目を惹くべきものを十分持つていると思われる。

ただここに若干の注意を要すると思われることは、そういう皇室に対する批判と並んで、或はその裏に、漱石の、皇室に対する眞の敬愛の精神のあることも見逃せないということである。漱石が

元来明治天皇を敬愛しまつた事は、明治四十五年(1912)七月二十五日の橋口貢宛の書簡や、同年八月八日森岡月宛の書簡や、山田三良に依頼されて「法学協会雑誌」に載せた「明治天皇奉悼之辞」や、御大葬当時の句を見れば明らかなことであり、「こころ」の「私」の父親や先生の言動にも表わされているし、この事は小宮氏もその「夏目漱石」の中で触れて居られるのであるが(「明治天皇崩御」同巻七四六頁～七五三頁)、そういう精神は今度の「断片」や「日記」からも十分汲みとる事は出来る。そうしてそれが皇室批判と矛盾でも何でもない事は言うまでもないことであつて、ただ道理や眞実を愛し尊んだ漱石は、個人、特に細民の生活を抑圧する無意味な権威を不条理なものとして排斥したのであり、それは皇室と雖も許せないとしたのである。と同時に、単なる「盲従」や馬鹿丁寧な言辭が、皇室に対する眞の敬愛には当らない事をも言つていたのであつて、こういう批判と、皇室を尊敬し、天皇の御重忠や御死を人間のそれとして同情し悼む事は漱石に於て自ら別である、と言うよりは寧ろ漱石は、人間としての陛下、殿下にどこまでも眞実を以て対することにこそ皇室に対する眞の敬愛もあるとするのであるが、それはともかく、この皇室に関する「断片」や「日記」は、漱石の道理に基く高い見識と鋭い批判を示し、「人間」を、随つてまた「自由」を、飽くまで尊重してやまなかつた人間漱石の一面を遺憾なく伝えるものであると言うことは出来ると思うのである。

Ⅲ

しかし漱石の内面生活、そこから生まれてくる作品や思想を考える上に、より重要な問題を提供しているのは、むしろ家庭生活に関するものであろう。これは大正三年(1914)十月三十一日から十二月八日あたりまでの日記で、ひとまとめにされているものの由であるが、そこには鏡子夫人や女中や出入りの植木屋や門人に対する不愉快な感情が赤裸々に綴られてある。特に夫人に対する事が中心になつている。勢いこの資料について考える場合には、漱石夫婦の生活が問題になつてくる。私はもとより漱石に対して私的関係は全然ない人間であり、ただその人と芸術に敬慕の情を寄せている一後輩者に過ぎないから、こういう問題に立入つてこれを論ずる者としては不適當であり、つしまなければならぬとも思うが、一応触れなければならぬであろう。

漱石と夫人との関係については、漱石の作品・書簡・断片とか、鏡子夫人の「思ひ出」、或は子女の談話筆記等によつて既に或る程度まで明らかにせられて居り、また或る程度の想像もつくのである。多くの研究書にも扱われて居り、小宮氏の「夏目漱石」には特に「夫婦の問題」の一章章え設けられている。そうしてその仲は必ずしも円満ではなく、而もそこには漱石に対する夫人の理解の不足が大きくはたらいていた事は、小宮豊隆氏・安倍能成氏等直接その家庭に出入し、漱石夫妻の愛を受けた人たちによつて語られてもいる所である。殊に「道草」などになると、漱石夫妻の緊張した関係が、極めて深刻にリアリステックに描かれているし、また明治四十年(1907)六月二十一日鈴木三重吉宛書簡には、「肝癆が起ると妻君と下女の頭を正宗の名刀でスバリと斬つてやり度い。然し僕が切腹をしなければならぬからまづ我慢するさうすると胃がわるくなつて便秘して不愉快でたまらない僕の妻は何だが(原)人間の様な心持ちがしない。」(第十六巻「書簡集」五四九頁)というのがあり、小宮氏の「修善寺日記」明治四十三年九月十一日の所にも、「妻はどうしてる」と訊かれ、奥さんはゆうべ眠られなかつたそうで、今晝寝をしておいでですと答えると、漱石は、「嘘だよ、あいつは眠いからそんな事を言ふんだよ。どうしてあんなに眠るのかなあ、まるで修善寺に眠に來たやうなものだ。あんな妻は厭になつた。」と言われたとあるし(「文学」昭和十一年十二月号一〇頁)、そういうものにかなり劇しい不愉快な感情の表白も見られるが、しかし今度公にされたもの位、露骨で、具体的で、そうして憎悪や憤りに充ちたものはないであろう。而もそれは世間に公にするつもの全くない「日記」という形をとつていたのである。その点従来想像せられていたものを遙に

越えるものがあり、漱石夫妻の關係の險悪さに今更の如く驚かされるのである。今迄秘められてあつた理由もうなづかれる。

IV

もつともこの資料を見る場合には一つの重要な注釈が必要であろう。というのは、漱石は英国に留学中極度の神経衰弱に罹り、帰朝後も或る時期或る時期にそういう状態が繰返されたという事実である。「漱石の思ひ出」乃至多くの年譜によると、帰朝直後、即ち明治三十六年(1903)千駄木時代に劇しい時期があり、大正二年(1913)の一月から六月にかけて第二回目の危機があつたとなつている。この日記は大正三年であるが、同年三月二十九日には津田青楓に宛てて、「私は馬鹿に生れたせるか世の中の間人がみんないやに見えます夫から下らない不愉快な事があると夫が五日も六日も不愉快で押しで行きます、丸で梅雨の天氣が晴れないのと同じ事です自分でも厭な性分だと思ひます/世の中にすきな人は段々なくなります、さうして天と地と草と木が美しく見えてきます、ことに此頃の春の光は甚だ好いのです、私は夫をたよりに生きてゐます」(第十七卷「続書簡集」三五三頁)と言つているし、同年十月二十八日西川一草亭宛書簡にも、「あの書画帖へ出鱈目なものを書きましたのは事実ですそれを青楓君に見せたのも事実ですが実は不愉快で不愉快でたまらなかつたのでむしやくしや紛れに書いて仕舞つたのです夫をあとから見るととても人に差上られるやうなものではありあり(原)ませんので其儘に〔し〕てゐるうちについ病氣で寝てしまつたのです」(第十七卷四一七頁)どあり、また十二月二十七日木村恒宛書簡でも、「歳は行き詰まる私の気分も行きつまる何をするのも厭であります」(第十七卷四四一頁)と言つているので、大正二年の神経衰弱はこの年まで尾を引いていたと見る事は恐らく誤りではなからう。事実この日記に現れている夫人や女中の言動に対する漱石の感じ方には、「漱石の思ひ出」に出ている第一回千駄木時代の神経衰弱におけるそれと酷似している所がある。夫人は当時医師の尼子四郎や吳秀三の診断をきいて「なる程と思」い、「病氣なら病氣ときまつて見れば、其覚悟で安心して行ける」と思い、漱石を精神病患者として扱うのであるが(「思ひ出」一〇八頁—一一〇頁)、今度の日記を見ても、夫人の態度にはそういう所が見受けられる。例えば、虫封じの呪に漱石が腹を立てて、その箱をたたき壊し、其の破片を裏の芥溜に投げ込んでしまつた事が記されているが、この事件は「思ひ出」にもそのまま出ており、(もつとも年は大正二年のある日となつている)そこで夫人は、「それでもさうなつて来ると妙なもので、愈、虫封じのおまじなひがやめられず、次ぎには矢来の兄さんの家に置いて貰つて、毎日一度づつ行つては釘の頭を叩いて居たなどといふ喜劇もございます。」(二七八・二七九頁)と言つているのである。これはあくまで「思ひ出」であつて、夫人の感情の上にも或るゆとりが出来ている点は考慮しなければならぬが、それにしても夫人が漱石を病人扱いし、さてはこの出来事を「喜劇」扱いまでしている事が判るのである。総体に「頭が悪い」「また始まつた」という夫人の口吻や態度はこの日記に於ても否定出来ないように思われる。あとにも述べるように、漱石のある異常な興奮状態を精神病と見ることに無論問題があるが、それはとにかく、漱石がしばしばかなり度の強い神経衰弱乃至は神経質的の症状を示した事は事実の様であるし、この日記の書かれた大正三年は、その前年に引続き、その一つの時期に當つていた事は十分念頭に置く必要がある。

事実この日記を見ると、公平に言つて、漱石の普通でない、いわば神経衰弱的な感じ方考え方を否定するわけにはいかないようである。小宮氏もその解説で、「漱石の神経衰弱的なものの受け取り方、反応の仕方が、また極めて露骨に書き現はされてゐる」と言われているし、また恐らく同氏の言を伝えたものであらうと思われる大阪朝日新聞六月廿六日の「秘められた漱石日記近く公表」の紹介文の中にも、「ことに夫人に対する記述は、外出、買物、女中の雇入れ、看病の仕方など被害モウソウ的なあて推量が日記を満すばかりだ」とある。その偏執と意地と癩癩には確に尋

常でないものが感じられるし、異常な精神状態、少くも変つた性格を認めないわけにはいかないし、小宮氏も言われるように、そこに漱石の一つの大きな弱点を見せられる思いがするのである。

しかしながら同時に又、その見方、考え方の全部を「病氣」とし「頭の悪い」時の現象に帰するのも間違いであろう。その限界は実は非常にむずかしい所と思われるし、専門医の診断に俟たねばならないが、専門医にとつても、正常と神経衰弱と神経質と軽い精神病との明確な判断は極めて困難だという事である。小宮氏はその「夏目漱石一再び神経衰弱一」の中で、帰朝後第一回の漱石の神経衰弱の事に触れ、「然し尼子四郎や吳秀三の診断にも拘らず、かういふのを精神病者と見做して可いかどうかに就いて、私は深刻な疑ひを持つてゐる。」(四六〇頁)とされ、その理由を説明し、反証を挙げて居られるが、それはこの日記を読む場合にも参考になるものである。もつとも、夫人や長女鏡子や次男伸六や義弟中根倫等の伝える漱石の言動の中には、素人の考えではあるが、病的なものがないわけではなく、むしろ夫人や子女たちに同情すべき点も多く見られるのであつて、小宮氏の断定にも全面的には従い難く、その点小宮氏の見解に反対している森田草平の意見(「続夏目漱石」—神経衰弱か精神異常か—等)に一理もあると思われるが、しかし少くともこの日記に関する限りに於ては、病氣どころか、寧ろ健康で正常な見解の多くが見られるのである。例えば、これは小宮氏も「夏目漱石」の上の文の中で指摘して居られるのであるが(四六二頁)、鏡子夫人の妹婿鈴木禎次の父の葬式の時、漱石を人力車に乗せ、自分は馬車に乗つて葬式を送ろうとした事に対し、漱石が激怒している如き、草平の、夫人への同情論もあるにはあるが、やはり漱石が怒るのが当り前のように思われる。また前に挙げた虫封じの箱をたたき壊した事にしても、小宮氏は、「然し石倉小三郎によれば、鏡子は既に千駄木にゐる時分から、妻恋稻荷へ行つて虫封じの御祈禱などを頻にしてみらつてゐるのである。漱石は昔からそれを知つてゐて、その迷信と無理解とを不愉快に思つてゐるに違ひないのである。」とし、そういう事を敢てすれば、「漱石から憤られるといふ事は、初めから知れ切つた事である。」(「夏目漱石」四六二・四六三頁)とされているが、私にもその通りの様に思われる。またきくという女中(?)の事を漱石に無断で夫人がはからつた事を漱石が難詰すると、夫人は「ちやあやまりませう」と言つたに対し、漱石は、

「ちや」は余計(原、無廢)だ。御前は今日迄夫に心よくあやまつた事はなからう是から先もあるまい、又さういふ素直な女ならこんな事で面倒も起る筈がないし、起つても快よくあやまるだらう。(「世界」八月号二三三頁)

と記している。漁師の娘だとか号する下女が漱石の病中(胃潰瘍)段々笑い出した、これを夫人が「あんまり笑ふのはおよし、口惜しがるから」といつて注意したのを聞きつけて、

私の無暗に笑ふ事が嫌なのは妻のよく承知してゐる事であつた。然し私は此下女の笑ふの不快も抱かなければわざとらしさも感じなかつた。／然し口惜しがるとは一体誰が口惜しがるのか、けしからんと思つた。(同誌二三七頁)

と言つてゐる。以上の如き、若しそれが事実だとすれば、どうみても漱石の側に理があるとはか思われぬ。下女の言葉遣いの間違つてゐるのを憤慨し、繰返し繰返し記したり、植木屋の無礼をも怒つてゐるが、そこにはむしろ漱石の、飽く迄道理を重んじ、筋道の通らぬ事は寸毫も仮借しない気持が、十分に汲み取られるのである。

元来漱石は、純粹なもの、正しいものを愛した人である。こちらが純粹で正しくさえあれば、漱石も亦純粹で、天真な、愛に充ちた気持で応じたようである。一旦相手に不純粹で、虚偽で、技巧的な所が見えると、激しくこれに反撥し、これを憎悪したのである。而もそういう不純粹で不眞実な自分を少しも反省しようとしなない様な人、漱石の気持を本當に理解しようとしなない様な人に対しては、かなりきびしく当ることもあつたようである。したがつて人によつて漱石の仕打を正常とも異常とも見る場合があつたであろうことは容易に想像される。現に、英国留学中、漱石が発狂したという話が拡がり、岡倉由三郎がその旨文部省に報告した為、文部省では藤代禎輔に「夏目ヲ保護

シテ帰朝セラルベシ」と電命した。ところが藤代氏が漱石にあり、その下宿に一泊して見た様子では別段心配する程の事も認められなかつたという事実もある。漱石自身がこういう自分からまる喉を鏡子宛書簡に於て一笑に附し (明治三十五年三月十八日附、第十六卷一七二・一七三頁)、「文学論」の序に於て皮肉つている (第十一卷一七・一八頁) のも周知の事柄である。この日記の場合にも、夫人の漱石に対する無理解が、烈しく漱石の感情を刺戟し、漱石を憤らせたと思われる所が多分にある。したがつて、帰朝後第一回の神経衰弱について小宮氏の言われている「漱石は道理に戻る、一切のものを憎んだ。それだけ漱石は、道理に戻る一切のものを、機微に看破する、鋭敏な感覚を持つてゐた。同時に漱石の想像力は豊富であり、漱石の頭脳は迅速に活動した。誰にも気がつかないほどの小さな汚染でも、漱石の眼には大きなものとして映り、／その為に悩み、その為に狂つて、停止する事を知らない状態に置かれる事も、十分可能なのである。」「私から言はせれば、漱石の当時 (註 明治三十六年頃) の肝癥の根本は、鏡子の無理解と無反省と無神経から来てゐるのである。」(「夏目漱石」四六三・四七〇頁) という見方が、この場合にも正しい解釈となる様に思われるのである。こう見て、この日記は、漱石の弱点を暴露すると共に、夫人の弱点をも示していると言えよう。結局、漱石自身がかつて言つたという「つまり両方で神経衰弱なんだ」(「思ひ出」——頁) という言葉が、そつくりそのまま当てはまりそうであるが、とにかく、この日記が或る時期—大正三年頃の漱石夫婦の内面的相剋とか、その破綻の一つを如実に示していることには間違いないのである。

といつてこの事が直ちに、漱石に、夫人に対する愛がなかつた、という事にはならないこと無論である。この点はこの稿の主目的からはずれるので詳論することは避けるが、漱石が夫人を思い愛していた事は、文献からでも容易に立証し得る事であり、この痼癥それ自体も、見様によつてはその愛を物語ることになる。和辻哲郎氏に宛て、一高教授としての自分の態度について書き送つた書簡の一節に、「けれども冷淡な人間では決してなかつたのです。冷淡な人間ならあゝ肝癥は起しません。」(大正二年十月五日、第十七卷二九五頁) の言葉も見られる。この点は子女に対する場合も同様であるが、漱石は寧ろ「心」の先生のように、妻や子を「愛し得る人、愛せずにはゐられない人、それでゐて自分の懐に入らうとするものを、手をひろげて抱き締める事の出来ない」夫であり父であつた。妻や子も亦その懐に飛びこもうとしなかつた。そこに漱石の夫として又父としての大きな悲しみがあつた、不幸があつたと私には思われるのであるが、この事についてはただ附言するに止める。

V

大正三年 (1913) のこの日記は、今見て来たように、主として夫人や下女たちに対する憤りとか痼癥を露骨に吐き出したものであるが、それだけにまた当時の漱石の内面生活が、いかに不愉快や苦痛に充ちたものであつたかを我々に物語るものでもある。一体この日記で日附の明瞭なのは、十月三十一日・十一月一日・七日・八日・九日・十二月・十二月八日位で、あとの大部分は判らない。中には九月の病氣 (胃潰瘍) 以前の事もあり、病中の事もあり、去年の事として記している部分もある。したがつてこれは、普通の日録的な日記とは多少趣を異にする。まあ大体大正三年後半頃の内面生活の日記と言えるし、もう少し括げて大正二・三年頃のそれと見てもよいのではないかと思う。「漱石の思ひ出」によると、「よく日記を書いては後で破いて捨てる人」(一二三頁) だつたというから、或は大正二年頃にも、これに近い日記を記していたかも知れないのである。現に、前節でも触れたように、大正三年の初めと終りにも不愉快でたまらないという書簡を書いているし、大正二年に神経衰弱のひどい時期があつたことも既に触れた所である。もつともそういえば、漱石の内面生活は全生涯にわたつて不愉快に充ちたものであつたとも言えるのであるが、特に或る時期に於て甚だしくなるのであり、大正二・三年頃もその一時期に當つていた、その事をこの日記は我々に示しているとも言えるのである。しかも漱石には胃潰瘍という持病があり、大正二年の三月と大正三年の九月にもそれをわずらつている。こう見ると、大正二・三年は肉体的にも精神的にも非常に苦

しい時代であつたと想像されるが、とにかくこの日記は、当用的な事柄を日を追うて記した日記ではなく、或る期間、具体的には大正三年の後半に於ける内面生活の告白日記の性質を持つている。そういう立場に立つて考えると、その前後の漱石の作品や思想を考える上にも、この日記は重要な意義を持つのではないかと思われてくるのである。

大正三年から四年にかけての漱石の作品暦を調べてみると、一月七日から十二日にかけて「素人と黒人」を発表し、四月二十日から八月十一日まで「心」を発表している。その後九月から十月にかけて胃潰瘍をわずらつているが、ちょうどこの日記が書かれた頃と思われる十一月二十五日には、学習院で「私の個人主義」の講演をしている。大正四年(1914)に入ると、一月十三日から二月二十三日まで「硝子戸の中」、六月三日から九月十日まで「道草」が夫々朝日紙上に掲載されている。そうしてここに注目されるのは、「私の個人主義」「硝子戸の中」「道草」には、その何れにも漱石自身の内面の問題や身の事が扱われているという点である。前二者はそれが講演なり執筆なりの主目的ではなかつたようであるが、結果からみれば、自分自身の事に多く触れている。即ち、「私の個人主義」では、個人主義の内容を説明し、金力や権力によつて個人の人格を抑圧したり傷つけたりしてはならない事を、学生の大切な心掛けとして説こうとしたのであるが、その前提として漱石自身の履歴、特に迷いの履歴を端的に告白しているのである。今日読みごたえのあるのも寧ろこの部分である。「硝子戸の中」は、「たゞ春に何か書いて見ると云はれたから、自分以外にあまり関係のない詰らぬ事を書くのである。」と断つて書き出しているように、書齋の漱石を取りまくいろいろの出来事を綴つた随筆であるが、特に十九あたりから、自身の経歴に関する追憶が表に出るようになる。そうして筆を擱く頃になつて、「私は今迄他の事と私の事をごちやごちやに書いた。他の事を書くときには、成るべく相手の迷惑にならないやうにとの掛念があつた。私の身の上を語る時分には、却て比較的自由な空気の中に呼吸する事が出来た。それでも私はまだ私に対して全く色気を取り除き得る程度に達してゐなかつた。嘘を吐いて世間を欺く程の術氣がないにしても、もつと卑しい所、もつと悪い所、もつと面目を失するやうな自分の欠点を、つい発表しずに仕舞つた。」(第十巻「小品」六一四頁)と言つている。そうしてその「もつと卑しい所、もつと悪い所、もつと面目を失するやうな自分の欠点」を赤裸々に抉別し解剖して見せたのが「道草」であつた事は言うまでもないであろう。もつとも、漱石のどの作品をとつても、そこに漱石の性格や思想や生活を投影してないものはないのであるが、しかしここに挙げた一連の作品には、特に「道草」には、殆んど何のフィクションの痕跡なしに漱石の生活が扱われ、その姿一弱点となる姿が、如実に描き出されてくるのであつて、今度公にされた大正三年の日記との間には、時日の上からいつても内容の上からいつても、何か密接な関係がありそうに思われてくるのである。

その推論に入る前に、もう一つこれに関連して重要と思われる事実を挙げてみると、漱石は大正二年頃から書画に凝り出すが、特に良寛の書に傾倒し、これを学び、しきりにこれを持ちたがつたのは大正三年である。良寛の書が良寛の人格を背景とすることは言うまでもないことである。また「硝子戸の中」や「道草」が高い澄んだ境地になつている事は、既に一般に認められていることであり、事実でもある。「硝子戸の中」の終りの所で漱石は、

然し私自身は今其不快の上に跨つて、一般の人類をひろく見渡しながら微笑してゐるのである。今迄詰らない事を書いた自分をも、同じ眼で見渡し、恰もそれが他人であつたかの感を抱きつゝ、矢張り微笑してゐるのである。

まだ鶯が庭で時々鳴く。春風が折々思ひ出したやうに九花蘭の葉を揺かしに来る。(第十巻六一四頁)

と書いてある。そこには確に澄み徹つたものがある。「道草」は言うまでもなく一般に自叙伝小説と見られるものであるが、そこには、今も触れてきた様に、むしろ漱石の弱点がリアリティに

暴かれている。しかしそういう事は余程人間としての私を去つた高い境地に達しなければ出来ないことは、容易に考えられることであり、また少しく「道草」を注意して読めば、健三と漱石の間には、その心境の高さに於て、格段の相違のあることは誰にでも判る所であろう。言うまでもなく漱石は健三を遙に超越した立場に立つている。そしてこの「道草」執筆当時、大正四年六月十五日には、武者小路実篤氏に宛てて、有名な書簡、

武者小路さん。気に入らない事、癪に障る事、憤慨すべき事は塵芥の如く沢山あります。それを清める事は人間の力で出来ません。それと戦ふよりもそれをゆるす事が人間として立派なものならば、出来る丈そちらの方の修養をお互にしたいと思ひますがどうでせう。私は年に合せて気の若い方ですが、近来漸くそつちの方角に足を向け出しました。云々。(第十七卷四八九頁)を送つていたのである。この「求道」的な態度は、大正五年(1915)に入ると一層濃厚に且つ直接的になつてくる。それは、

私は私相応に自分の分にある丈の方針と心掛で道を修める積です。気がついて見るとすべて至らぬ事ばかりです。行住坐臥ともに虚偽で充ち充ちてゐます。耻づかしい事です。(大正五年十一月十日 鬼村元成宛 第十七卷六一三頁)

変な事をいひますが私は五十になつて始めて道に志ざす事に気のついた愚物です。(同年十一月十五日 富沢敬道宛 第十七卷六一五頁)

という書簡がはつきり語つている所であるが、所謂「則天去私」という言葉がはじめて漱石によつて語られたのもその頃のことであつたのである。(松岡謙氏「漱石先生一宗教的問答一」参照)

そこでこの三者、つまりこの大正三年の日記と、それと同時に乃至その直後に来る講演・作品と、そこに示された求道的志向の三つを突き合せて漱石の当時の内面の問題を考えてみると、私には次の様な一つの判断が浮んでくるのである。つまり、漱石と、漱石をとりまく人間、殊に妻との不愉快な関係は一それは寧ろ漱石生涯の宿命的な重荷であつたが大正二・三年頃に再び險悪の度を加えてくる。「漱石の思ひ出」に謂う所の「第二の危機」であつた。漱石は、自身に神経衰弱的なものの昂進もあつたが、最も近親な妻の無理解と無神経と、要するにその卑小なる「我」に極度の怒りを覚えるのであるが、しかし同時に又漱石には、そういう卑小な醜さは已れ自身の欠点でもあるという自覚があつた。反省的な漱石にその事が気がつかない筈はない。それだけ漱石は深刻な苦悩を経験しなければならなくなる。そしてそういう苦悩を脱却する為には、所詮自分自身の「我」をつきとめ、思う存分に解剖し、そしてこれを克服するより途はないという厳しい反省に達し、ここに漱石の激しい所謂「己事究明」が始まる。もとよりそれは生やさしいものではなかつたであろうが、しかも漱石は次第にこの苦闘を克ちぬき、一步々々高い境地に登つて行つたのではなからうか、それが大正二・三年から五年にかけての漱石の内面生活の動きではなかつたらうか、という事である。修善寺の大患が漱石の人間観・世界観に大きな変化を与える転機となつたということは既に指摘されている事である。それまで何れかといえば社会的問題により多くの関心を示していた漱石が、人間個人の内面の問題に眼を向けるようになったこともその一つの傾向であつたが、それを自己自身の切実な問題として一層はげしく漱石をゆるすぶり、漱石に思想的な反省を与え、「己事究明」にぎりぎり漱石を追いやる一つの大きな、そして恐らく最後の機縁となつたものは、この大正二・三年の不快に充ちた、障害多い生活であつたのではあるまいか、ということになるのである。もとより一個の人間の内面生活が、どういう経過をとつてどう動いて行つたか、その精しい事は判らない。殊に漱石の様なすぐれた思想家の場合にはなおさらの事である。したがつて以上の判断は極めて直観的な臆測の域を脱しないが、若しこの判断がある程度の信憑性を持ち得るとすれば、今度公にされた大正三年のこの日記は、晩年の漱石を解く一つの鍵、一今迄とは別の全く新しい鍵ではないにしても、重要な一つの鍵であるといつても可いのである。少くとも、「硝子戸の中」や「道

草」の生れる重要な条件を示し、「則天去私」の成熟をもたらす契機を内に持つものであると言うことは出来そうに思うのである。

Ⅶ

もつとも、こういう点に関しては、見方によつては全然別の考え方も出てくる。即ち、この日記にあらわれた物の見方考えたと、その直後に接続する「硝子戸の中」や「道草」のそれとは、大きく矛盾しはしないか、ひいては漱石の則天去私という思想もあやしいのではないか、という疑問である。則天去私の思想については、ここに言うまでもなく、漱石自身は精しい説明をなさずに世を去つてしまつたので、残念ながらその内容は精確には判らない。ただ当時漱石がこれを敷衍して、「つまり普通自分自分という所謂小我の私を去つて、もつと大きな謂はゞ普遍的な大我の命するまゝに自分をまかせるといつたやうな事なんだが、」とか、「柳は緑に花は紅でそれでいゝぢやないか。あるものがあるがまゝに見る、それが信といふものではあるまいか。」とかいう事を、娘がめづかちになつた例え話を引きながら語つたという事を手がかりにして、いろいろの解釈がなされているのである。もつとも板垣直子氏のように、「平凡な判りきつた東洋思想」（「漱石・鷗外・藤村」四〇六・四一八頁）と片づけている人もあるが、単なる字義でなしに、その内容に少しく立入つて考えてみると、なかなか複雑で深いものを内包しており、簡単には言い尽せないもののように思われるし、軽々しく解釈することは危険であろう。私にもまだ本当の所は判らないが、ただ従来の研究によつて説かれている所に大体従つて、この日記の世界を考えてみると、それは明らかに則天去私に程遠いものと言わなければならない様である。少くとも、「硝子戸の中」や「道草」や、或は武者小路氏に宛てた大正四年の例の手紙などに見られるあの透徹した高さ・静けさは、この日記には微塵も見られないし、凡そその反対の境地であつて、それは矛盾といへば明らかに矛盾である。それならば、その間の関係をどう解釈したらよいか、これは確に一つの問題である。

これについてはいろいろに考えられるかと思う。例えば、一つは、この日記の内面生活は特別の状態、極端に言えば鏡子夫人の所謂「病氣」のそれとして、特別に切り離して考える考え方である。若しこの考え方に従うならば、問題は極めて簡単に解決してしまう。しかし私は既に述べて来たように、そこには神経衰弱の乃至神経質的な所は確にあるにしても、反面極めて研ぎすまされた、正常で健康な論理を見逃すことは出来ないとする者であつて、今の所この考え方に全面的には従い難いのである。それでは第二の考えとして、漱石の思想や心境がこの日記を境として急転回したと見られはしないか、という考え方である。これも若し許されればまことに割り切れて都合のよい解釈ではあるけれども、以下述べる様な理由によつて、この考え方にも私は従い得ない。というのは、漱石はこの日記の前に既にかかなり高い境地を示している。それは、「思ひ出す事など」「彼岸過迄」「行人」「心」と辿つてみても判ることである。またこの日記の書かれた頃、即ち大正三年十一月十二日の木曜会の談話（松浦嘉一「木曜会の思ひ出」）や、翌十三日林原耕三氏宛書簡（第十七卷四二八頁）によると、一つの「死生達観」ともいうべき境地を示している。「私の個人主義」にしても高く澄んだ心境である。逆にこの日記以後のものを調べてみると、「硝子戸の中」にしても、小宮氏が、「はつとねんと『硝子戸の中』に閉ぢ籠つていても、／＼頭の中には、実に切迫した動乱を藏してゐたのである。」（「夏目漱石」八三—頁）と言われている様に、決して晏如たるのみとは言ひ切れないものがある。「今の私は馬鹿で人に騙されるか、或は疑ひ深くて人を容れる事が出来ないか、此両方だけしかない様な気がする。不安で、不透明で、不愉快に充ちてゐる。もしそれが生涯つゞくとするならば、人間とはどんなに不幸なものだらう。」（「硝子戸の中」三十三）の一節が何よりもよくこれを説明している。「硝子戸の中」を書き終つた漱石は、津田青楓の勧めに応じて京都に旅するが、そこで親しく交つた磯田多佳に対し、たまたま彼女が北野の天神へ漱石を案内するという約束を反故にした事に対してだけはどうしてもゆるすことは出来ない旨の手紙を書いている（第十七卷四七五・

四八一頁)。もつともこれについては小宮氏の「許すといふ事は、是非曲直の区別を曖昧にするといふ事ではなかつた。云々」(「夏目漱石」八三七頁)という注釈があるし、第一「ゆるす」という事の意味が問題になるが、今は深く触れない。もう一つ著しい例を引くと、大正五年四月二十日前後のものらしい日記に、

○喧嘩、不快、リパルジョンが自然の偉大な力の前に畏縮すると同時に相手は今迄の相違を忘れて抱擁している。

○喧嘩。細君の病気を起す。夫の看病。漸々両者の接近。それが action にあらはるゝ時。細君はたゞ微笑してカレンジングを受く。決して過去に溯つて難詰せず。夫はそれを愛すると同時に、何時でも又して遣られたといふ感じになる。(第十五巻「日記及断片」八六二頁)

というのがある。これも意味深長な記録であるが、これなども漱石と夫人との調和しない関係がなおいつまでも続いた事を示すものともとれるのである。それは、「漱石の思ひ出」の「其後亡くなる年にも亦起こつて居りましたが、／たうとう死ぬ迄時々思ひ出したやうに起こつて居りました。」(二九五頁)とも合せ考えられる事である。こう見てくると、この日記を転機として、漱石の思想が、例えば、「迷い」から「悟り」に、「怒り」から「許す」に、「動乱」から「静平」に、はつきり転換したとは考えられそうもないのである。やはりそこに矛盾らしいもののあることは否定出来ない。しかしさればといつて私にはこれを単純に「矛盾」として突き放すことも正当でないように思われるのである。

かように考えてくるとこの問題は、かなり複雑微妙な、したがつて又かなり困難な問題であつて、簡単に結論は出そうにもないのであるが、ただ現在の私としては、両者の間に何か密接な関係のあることを思い、これを調和してみる立場に立つて、大体次の様に考へている。即ち、いかにもそれは一応矛盾には違いないが、漱石はその矛盾をはげしく追求しつつ、その超克に向うのであり、且つそれは漱石に於て可能であつたのではないか。元来則天去私の思想は、相互否定的契機の止揚という禅的な「無」の趣を多分に持つ思想と私には考えられる。死を礼讃しながら生きて行く、それが生というものだとか、あるものをあるがままにみるとか、不快の上に跨つて一般の人類をひろく見渡ししながら微笑している、という様な言葉にもそれを想わせるものが十分ある。岡崎義恵氏の則天去私の解釈の一節に、「それで他人の不正を發いたり、虚偽を斥けたりする攻撃的精神は、この『天』に達する道程として、又『天』の応用として、避け難いことであつたが、このやうな『巡査や探偵』のやうな行為は、まづ『天』の用と考へて然るべきものであらう。『天』の体としてはいかなるものに対しても、『平靜に眺める』こと、『それをゆるす事』であらうかと思はれるのである。」(「日本芸術思潮」第一巻五六八頁)というのがあるが、この「体用」説もこの場合一つの解釈の仕方になるかも知れない。さしづめこの日記の世界はその用に当ることになるが、ともあれそういう対立矛盾する契機をもともと含みながら、それを止揚する所に漱石の則天去私の道は開かれたと言つてもよいのではないかと思ふのである。

ただ漱石がどの程度にこれを克服し止揚し得たかということになると、やはり問題はどのころのである。一体漱石の則天去私の形成については、岡崎義恵氏の様に、「観菊花偶記」にまで溯り、かなり早い青年期にその萌芽を認めようとする説(「日本芸術思潮」第一巻、「芸術論の探求」)、小宮豊隆氏の様に、修善寺の火患をその契機として重視する説(「夏目漱石」その他)もあれば、滝沢克己氏の様に、「硝子戸の中」の後に太い一線を引くという考え方(「夏目漱石」)もあり、或は更に「明暗」以前の芸術は則天去私の芸術ではないとする栗原信一氏の様な考え方(「漱石の人生観と芸術観」)もある。各説の検討比較はここには措いて、「則天去私」という言葉自体は、死の直前の木曜会に於て、一つの標語の形で突然漱石の口から出たものには違いないが、この成語の熟する内的機縁は決して唐突でも浅いものでもなかつたと思われるし、やはりこれは漱石五十年の生涯をかけた道であり、か

つ幾つかの契機を重ねながら進んだ道であつたと見たい。その幾つかの契機のうち、特に修善寺の大患とか、「硝子戸の中」—それは大正二・三年の生活に密接に結びつく—を重視する意味に於て、小宮氏や滝沢氏の説も肯えるのであるが、ただその道は決して直線的なものではなく、むしろ常に螺旋的に辿られた道であつたと思う。時に大きく旋回する場合もあり、例えば、修善寺の大患とか、この日記に語られている大正二・三年頃の精神の暗黒時代は或はそれに当るものかとも思われるが、しかしそれが転機となつてそのままの直線コースを進み、大悟徹底するという様な精神の過程をとつたものではなかつたように思う。矛盾らしいものを最後まで覗かせ、則天去私への完全な到達を認めることを躊躇させる理由も実はそこにあるかとも思うのである。ただ、この日記から汲みとられる内面生活が、余りにも憤りとか憎悪に充ちて居り、且つ劇烈であつて、その後に関く作品や書簡や談話に示される、ものを「ゆるす」とか「平靜に眺める」といつたあの澄み徹つた精神の高みと余りに大きく隔絶している為、問題を投げかけるのであるが、漱石の歩いた道、則天去私への道が、人生の途上に横たわる幾多の対立矛盾する否定的契機を止揚しつつ、より高次の世界を志向し探求するものであつたと見れば、この問題もあながち解明出来ないものでもなさそうに思われてくる。ただこれは飽く迄一つの解釈に過ぎないのであつて、もつと精密な検討を要する問題であろうし、その結果は別の解釈も生れてくるかと思うが、現在の私としては、一応以上の様に考え、それに基いて、前節に於ける如き判断を加えてみたのである。

ともあれ、この様に見てくると、この度公にされた漱石の「日記」及び「断片」、特にその家庭生活に関する大正三年の「日記」は、漱石の「人」と「作品」を見る上に、多くの問題を提供するものであると言うことは出来るのであつて、その資料的意義も決して小さくはないと思われるのである。

(昭和30年9月30日受理)